

# 琉球大学学術リポジトリ

(資料) 甘蔗作地帯の農業経営：  
沖縄本島南部地区東風平村Y〇部落の調査

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政工学部 公開日: 2012-08-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池原, 真一, Ikehara, Shinichi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/25017">http://hdl.handle.net/20.500.12000/25017</a>

## 資 料

### 甘蔗作地帯の農業経営 沖縄本島南部地区東風平村 Yo 部落の調査

池 原 真 一\*

---

Shinichi IKEHARA: Farm management survey  
in the region of sugar cane cultivation.  
—Yo. Village, Kochinda-son, Southern  
District of Okinawa proper.

---

#### は し が き

この調査は、沖縄本島南部地区で甘蔗の作付面積が第 3、収穫高が第 2 の地位を占める東風平村において、蔗作農家の経営の実態を把握し、経営の合理化を推し進めるための一つの階梯として行ったもので、調査部落は戦後甘蔗の 10 アール当収量が顕著に伸びた Yo 部落を選定した。

甘蔗は調査村のみでなく沖縄における換金作物の大宗で、糖価の高低と収穫高の多少は農家経済に影響する所が大きい。糖価は今迄本土政府の特恵措置により安定が保たれ、収穫高の増加は従来主として栽培法の改善、品種の改良、風害、干害および病虫害の防除徹底によりなされてきた。新品種の導入が多取をもたらした点および風害、干害のない年に収量の増加が顕著であった事実等は今迄幾多経験した所である。然し経営の合理化の面から甘蔗作の適正規模の問題、耕地の合理的利用、経済性の面から春植+株出の 2 年 2 作と夏植+甘藷の 2 年 2 作の型の比較研究が従来余りなされていなかった様に思う。

之等諸事項の研究は沖縄における農業経営の合理化および甘蔗作の振興上優先さるべき問題であると思う。

本報告書は、東風平村および Yo 部落に於ける一般概況調査と 15 戸農家の聴取調査の結果を取まとめたものである。

調査の施行に当っては、政府経済局糖業課、東風平村当局、特に経済課の知念亀助氏、東風平村農業協同組合、Yo 部落の区長および調査農家の方々に一方ならぬ御協力を頂いた。厚く御礼を申し上げますと共に調査部落の今後の発展を祈って止まない。

#### 1. 調査村の概況

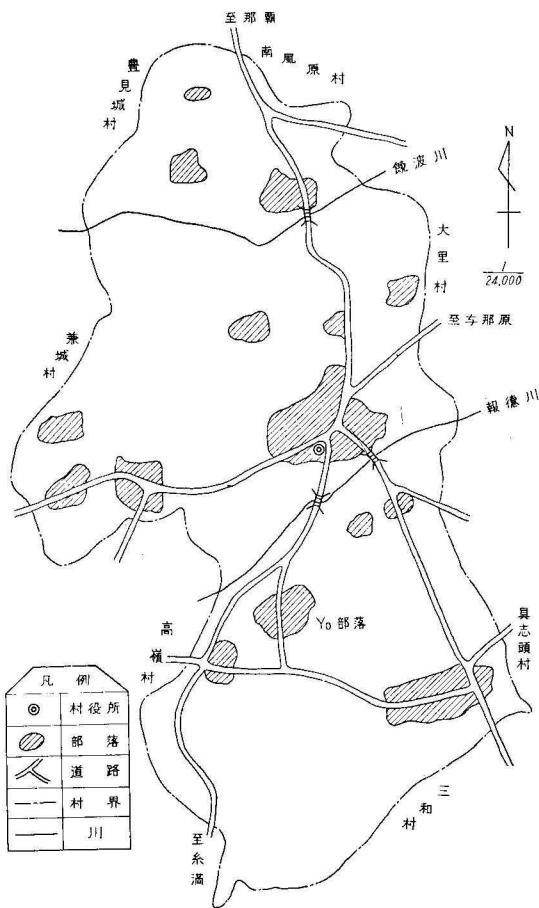
##### 1) 自然的条件

調査地の東風平村は、沖縄本島、南部地区の中央部に位置し、東は大里村、具志頭村、西は兼城村、南は三和村、高嶺村、北は豊見城村、南風原村に接続し海に面しない純農村である。

---

\* 琉球大学農家政工学部農学科

周囲は 17.4 km, 東西 3.2 km, 南北 6.3 km の細長い村で、総面積は 1573 ヘクタールでその大半が平地地で且つ地味も肥えている。河川は村を横断する報徳川と饒波川の2つあるが常時水量少なく村内の大部分の水田は水不足に悩む天水田である。従って2期作が干魃のため収穫皆無の年もある。交通は村を南北に縦走する幹線道路の外、公道が横走しバス、トラック、三輪車の便がよく、那覇市へ30分、糸満町、与那原町へは夫々20分前後で到着する距離にあって、交通の面では恵まれた村である。



第1図 東風平村地図

本村の土壤は第3紀泥灰岩土壤（俗にいうジャーガル土壤）が約8割を占め、珊瑚石灰岩土壤（俗にいう島尻マーチ）は僅かに点在するにすぎない。泥灰岩土壤は強い粘土質土壤で、有機物は少ないがよく肥えた土壤で生産力も高い。

気象条件は第2表に見る如く、戦後5カ年間の平均気温は22.5度（C）で、最高は7月の33.2度（C）、最低は1,2月の8.9度（C）、又降水量は年間2298.6mmで、その6割近くが5月から9月に集中し、その他の月は略平等に降っているが12月が一番少ない。

第1表 東風平村の土壤分析表

部落名	地目	土壌型	pH	置換酸度	置換性石灰	腐植	全窒素	有効磷酸	有効加里	土性
Yo 部落	畑	泥灰岩	6.9	0.08	0.30	1.74	0.160	非常に多量 (20)	中等度 (25)	埴土
同上	田	〃	7.4	赤変	0.34	1.80	0.192	〃 (20)	〃 (25)	埴壤土
東風平村	畑平均		7.0	2.37	0.37	1.72	0.137	〃 (18.7)	〃 (26.3)	〃
〃	田〃		7.3	赤変	0.35	1.72	0.160	〃 (19.5)	〃 (21)	〃
〃	全平均		7.2	1.05	0.36	1.72	0.149	〃 (19.2)	〃 (23.6)	〃

備考 経済局農務課資料より

第2表 気象条件

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平均又は極
平均気温	16.2	16.7	18.7	20.8	23.9	26.9	28.2	27.6	27.0	24.2	21.3	18.1	22.5
最高 〃	24.7	24.7	26.5	28.1	30.2	32.1	33.2	32.2	32.0	30.4	28.2	25.7	33.2
最低 〃	8.9	8.9	11.4	13.1	17.2	20.5	23.5	23.2	22.3	19.0	15.8	13.0	8.4
平均湿度	80.7	74.4	77.0	80.8	86.0	85.0	80.3	82.1	79.7	74.3	73.7	71.2	77.9
降水量	134.1 <sup>mm</sup>	148.1	123.5	166.6	257.4	313.9	176.6	332.4	256.5	116.7	205.9	82.8	2298.6
最大風速	17.1 <sup>m</sup>	16.4	14.9	15.6	13.3	14.7	18.0	28.9	23.4	16.4	17.3	18.0	33.0

備考 那覇气象台 1952~1956年5カ年平均

2) 社会的経済的条件

農業が本村の主体産業であることは戦前も戦後も変りはない。昭和15年における本村の全戸数および全人口に対する農家戸数および農家人口の割合は各94%、89%で、之を戦後の1956年についてみれば、農家戸数の比率は88%で昭和15年に比し若干減少しているが、農家人口の割合は同じである。その他の産業については、商業およびサービス業が増え、工業、畜産業は減少している。

第3表 産業別戸数および人口

	総数		農業		畜産業		水産業		工業		商業		其他	
	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口
昭15	1751	8636	1648	8145	2	5	—	—	10	54	38	120	53	312
1956	1701	8795	1505	7822	—	—	—	—	5	31	53	263	136	679

備考 村役所資料

1956年における本村の総所得は約85万8千円で、之を産業別に比率で示せば第1次産業が54.35%、第2次産業が9.04%、第3次産業が36.61%となっている。就業者1人当たりについて

てみれば、第1次産業が約 225 弗、第2次産業が約 336 弗、第3次産業が約 379 弗で全産業の平均は 350 弗である。1人当所得の最高は軍作業の 400 弗で、次いでサービス業の 392 弗の順、第1次産業たる農林業は最下位である。

## 2. 調査村の農業概況

### (イ) 農家および人口

本村の農家戸数を専業、兼業別にみれば第4表の如く、専業農家が944戸で全戸数の62.5%、第1種兼業農家が19.5%、第2種兼業農家が18%で、専業農家の比率は南部地区の比率よりも高い。

第4表 経営規模別、専業兼業別農家戸数

	実 数				割 合			
	専業農家	第1種兼業	第2種兼業	計	専業農	第1種兼業	第2種兼業	計
10 アール以下	63戸	4	39	106	4.2%	0.3	2.6	7.0
10 ～ 30 a	232	62	134	428	15.4	4.1	8.9	28.4
30 ～ 50 a	258	100	62	420	17.1	6.6	4.1	27.8
50 ～100 a	275	102	31	408	18.2	6.8	2.0	27.0
100 a 以上	116	26	6	148	7.7	1.7	0.4	9.8
計	944	294	272	1,510	62.5	19.5	18.0	100.0

備考 村役所資料(1956年10月)

専業農家を階層別にみれば、30～100アールの階層の農家が56%で、30アール以下の農家が32%、100アール以上の農家が12%となっている。

本村の自小作別農家数と割合は第5表の如くであって、1956年の割合についてみれば自作は南部地区よりも少ないが、自小作、小自作は多く、又小作は随分少ない。

第5表 自小作別農家戸数

	実 数					割 合					
	自作	自小作	小自作	小作	計	自作	自小作	小自作	小作	計	
1954年	736戸	447	227	75	1485	49.5%	30.1	15.3	5.1	100.0	
1955年	748	454	215	88	1505	49.7	30.2	14.3	5.8	100.0	
1956年	東風平村	641	475	310	84	1510	42.5	31.5	20.5	5.5	100.0
	南部地区	10901	5369	3263	3009	22542	48.4	23.8	14.5	13.3	100.0

備考 東風平村の分は村役所資料、南部地区は琉球農林統計表より

農家人口の推移は第6表の通りで、農家総人口に対する可働者の数は毎年減少し、非労働者の数は増加している。可働者の減少は村外への出稼者が多いためであろう。男女別に見れば1956年は前年に比して男女各々15%の減少である。

可働者の比率は南部地区の平均に比すれば高い方である。

第 6 表 農 家 人 口

	実 数 (人)						割 合 (%)						
	総 数			可 働 者			総 数			可 働 者			
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
1954 年	3619	4112	7731	1920	2183	4103	46.8	53.2	100.0	24.8	28.3	53.1	
1955 //	3871	4290	8161	1857	2174	4031	47.4	52.6	100.0	22.8	26.6	49.4	
1956 年	東風平村	3820	4198	8018	1585	1841	3426	47.6	52.4	100.0	19.8	22.9	42.7
	南部地区	57664	62299	119943	23789	23720	47509	48.1	51.9	100.0	19.8	19.7	39.5

- 備考 1. 可働者の割合は総人口に対するもの  
 2. 東風平村は村役所資料より、南部地区は琉球農林統計表より

経営規模別に見た村の農家戸数とその割合は第7表の通りである。規模別農家戸数は、

第 7 表 経営規模別農家戸数と割合

	5 アール 未 満	5~10 a	10~30 a	30~50 a	50~ 100 a	100~ 300 a	300 a 以 上	計	
	1954 年	49戸	93	338	431	481	93		—
1955 //	20	80	375	433	510	87	—	1,505	
1956 年	東風平村	17	86	428	421	409	149	—	1,510
	南部地区	1240	2374	6,026	6490	5103	1,060	249	22,542

割 合

1954 年	3.2%	6.3	22.7	29.1	32.4	6.3	—	100.0	
1955 //	1.3	5.3	24.9	28.8	33.9	5.8	—	100.0	
1956 年	東風平村	1.1	5.7	28.3	27.9	27.1	9.9	—	100.0
	南部地区	5.5	10.5	26.7	28.8	22.6	4.7	1.2	100.0

備考 東風平村は村役所資料、南部地区は琉球農林統計表より

10~100 アールの階層の農家に略等分に分布し、それ以上或は以下の階層の農家は至って少ない。100 アール以上の農家の割合は地区の割合よりも高く、100 アール以下の農家の割合は地区の平均よりは低い。300 アール以上の農家は1戸もない。

(口) 農 地

1956 年の土地台帳面に於ける農用地の面積は第8表の通りで、総面積において戦前の昭和12年に比し3万アールの増反となっているが、逆に耕地面積の方は2万アール以上の減反である。

第 8 表 農 用 地 の 構 成

	総面積 (a)	耕 地			公私有林	原 野			池沼	宅地	其他	軍用地
		水田	畑	計		公有	私有	計				
昭 12	129,640	3840	92,000	95,840	11,680	—	10,820	10,820	30	8,140	3,130	—
1956	147,260	3800	65,500	73,300	6,248	180	36,360	36,540	40	10,890	19,930	原野 300 道路 20
割 合												
昭12	100.0	2.95	71.0	73.95	9.0	—	8.35	8.35	0.02	6.27	2.41	—
1956	100.0	2.58	47.20	49.78	4.24	0.1	24.71	24.81	0.00	7.39	13.54	0.2

備考 村役所資料より

自小作別に見た耕地面積とその割合は第9表の如く、1956年の自作農家の経営面積は前年に比し8%強の減少なるも、自小作農、小白作農、小作農家の経営面積は各7%、39%、33%の増加となり、総経営面積において2%強の増加となっている。

第 9 表 自小作別経営面積と割合

	実 数 (a)					割 合 (%)					
	自 作	自小作	小白作	小 作	計	自作	自小作	小白作	小作	計	
1954 年	40,280	20,650	9,600	1,640	72,170	55.8	28.6	13.3	2.3	100.0	
1955 //	42,012	21,700	8,460	1,838	74,010	56.8	29.3	11.4	2.5	100.0	
1956 年	東風平村	38,416	23,272	11,832	2,440	75,960	50.6	30.6	15.6	3.2	100.0
	南部地区	589,720	248,310	125,150	193,610	1,156,790	50.9	21.5	10.8	16.8	100.0

備考 東風平村の分は村役所資料，南部地区の分は琉球農林統計表より

第 10 表 経営規模別面積と割合

	5 a 未満	5~10 a	10~30 a	30~50 a	50~100 a	100 a 以上	計
	1954 年	150a	770	6,760	17,240	34,230	13,020
1955 //	88	644	8,096	17,940	35,385	11,857	74,010
1956 年	東風平村	75	810	10,985	17,743	28,351	75,960
	南部地区	4,190	18,340	142,670	280,180	389,740	1,156,790
割 合							
1954 年	0.2%	1.1	9.4	23.9	47.4	18.0	100.0
1955 //	0.1	0.9	10.9	24.2	47.8	16.0	100.0
1956 年	東風平村	0.1	1.0	14.5	23.4	37.3	100.0
	南部地区	0.4	1.6	12.3	24.2	33.7	100.0

備考 東風平村の分は村役所資料，南部地区の分は琉球農林統計表より

経営規模別にみた本村の耕地面積は第 10 表の通りで、10～30 アール階層の経営面積は毎年増加し、それ以外の各階層の経営面積は何れも一進一退と云った所である。

1956 年における 10～30 アールおよび 50～100 アールの階層の経営面積の割合は南部地区の割合よりも高く、その他の各階層の面積の割合は何れも南部地区の割合より低い。

本村は周囲他市町村にかこまれている関係上出入作面積が他の市町村に比して多い。即ち第 11 表の如く、入作が 8 カ村、出作が 6 カ村にまたがっている。入作面積は断然南風原村が多く全体の 60% を占め、出作面積は兼城村、高嶺村に多く、総面積に対して夫々 56%、26% で、両村合して全体の 84% を占めている。両者の総面積において出作の方が入作よりも 840 アール多い。

第 11 表 出 作, 入 作 面 積

	入 作			出 作		
	畑	田	計	畑	田	計
南風原村	5,346a	587	5,933	—	—	—
具志頭村	591	229	820	940	561	1,501
高 嶺 村	756	157	913	2,797	—	2,797
豊見城村	514	6	520	238	—	238
三 和 村	150	—	150	—	—	—
兼 城 村	677	—	677	5,899	43	5,942
玉 城 村	18	11	29	—	—	—
大 里 村	482	168	650	32	22	54
計	8,534	1,158	9,692	9,909	626	10,532

備 考 村役所資料より

農家 1 戸当耕地面積は第 12 表の通りで、1954 年以降毎年少しづつ増反され全琉および南部地区の平均を上廻っている。水田は 1956 年頃迄は毎年少しづつ増反されているが、1957 年以後糖価の値上りと米価の下落に刺戟され天水田を甘蔗畑に切替える農家が続出、ために水田は減少し畑は増加した。この現象は今も尚続けられている。

第 12 表 農家 1 戸当耕地面積

	1954	1955	1956		
			東風平村	南部地区	全琉球
田	6.8 a	—	8.7	7.2	4.6
畑	41.3	—	41.8	41.1	40.8
計	48.1	48.6	50.5	48.3	45.4

備 考 全琉球及び南部地区の分は琉球農林統計表より、東風平村の分は村役所の資料



## (ハ) 農作物

本村の栽培作物は第 13 表の如く、その種類が多く、中でも作付面積の多いのは甘藷で、大豆、甘蔗、水稻の順である。換金作物の大宗は甘蔗で、1955 年の村の調査によれば、甘蔗の売上金額は 222.8 千弗、豆類は 37 千弗、蔬菜類は 9.9 千弗、いも類は 7.3 千弗で、甘蔗の収入が全体の 8 割強を占めている。

第 13 表 農作物の生産状況

作物名	收穫面積	10 a 当量	生産高	作物名	收穫面積	10 a 当量	生産高	作物名	收穫面積	10 a 当量	生産高
	a	立	千立		a	kg	千kg		a	kg	kg
水稻 1 期	7,880	245.5	1,935	里 芋	250	1,500	375	胡 瓜	150	2,063	310
同 2 期	2,230	218.2	574	甘 蔗 (春植)	2,660	7,920	21,067	南 瓜	190	1,875	356
大 豆	19,300	163.6	3,157	// (夏)	13,150	11,514	151,409	冬 瓜	500	2,325	1,163
菜 豆	180	163.6	29	// (株出)	2,020	6,336	12,799	茄 子	70	1,800	126
小 豆	10	54.5	0.5	人 参	50	1,500	75	牛 蒡	360	2,250	810
蚕 豆	520	218.2	113	大 根	140	1,800	252	葱 類	150	450	68
甘 藷	37,950	1,875 <sup>kg</sup>	71,156 <sup>千kg</sup>	甘 藍	350	5,400	1,890	玉 蜀 黍	—	—	—
馬 鈴 薯	650	937.5	609	白 菜	570	1,575	898	計	89,910		
水 芋	140	1,500	210	ト マ ト	40	1,875	75				

備 考 村役所資料より

本村の主要農作物は、甘藷、甘蔗、大豆、水稻でその作付面積は第 14 表の如く、その比率に於て以上の 4 作物が 95.2% を占め、中でも作付比率の多いのは甘蔗で全体の 42.2% を占めている。甘蔗の比率は 19.8% となっているが、夏植甘蔗の植付期 (7 月～8 月) 以降 12 月の收穫開始前迄は、本年末から来年の 3、4 月迄に收穫する甘蔗と、来年末から翌々年の 3、4 月に收穫する甘蔗があるので作付率も前期の 19.8% がその倍或はそれ以上に上ることもあり得る。

第 14 表 主要農作物の 10 アール当収量と作付率

	10 アール当収量			東風平村の 作付面積	同 左 の 作付率
	全 琉 球	南部地区	東風平村		
甘 藷	1,378 kg	1,800 kg	1,875 kg	37,950 a	42.2%
甘 蔗	5,726	7,751	10,302	17,830	19.8
水 稻	255 l	275 l	238 l	10,510	11.7
大 豆	131	153	164	19,300	21.5
其 他	—	—	—	4,320	4.8

備 考 東風平村の分は村役所資料、全琉、南部地区は琉球農林統計表より

主要農作物の 10 アール当り収量は、甘蔗、甘藷、大豆は南部地区および全琉平均よりも高く、水稲は 1 期、2 期共に低い。主食の自給度は 20% 内外といわれている。

耕地の利用率は水田が 152%、畑が 128% である。水田、畑ともに利用率は低い、之は水田の場合天水田が多く 2 期作が作付不能の水田あるによる。畑の場合は在圃期間の永い甘蔗の作付が多いためである。

(二) 家畜と農機具

本村の家畜頭数および飼育戸数の変遷をみるに、1954 年以降牛および豚は頭数、飼育戸数共に一進一退の状態、馬および小家畜は頭数、飼育戸数共に減少の傾向にある。

第 15 表 家畜の飼養頭数と飼養農家戸数

	飼 養 頭 数					飼 養 戸 数				
	牛	馬	豚	山羊	鶏	牛	馬	豚	山羊	鶏
1954年	262	58	2,529	1,162	4,416	232戸	58	1,050	690	979
1955//	249	58	3,770	1,465	2,783	215	57	1,192	591	791
1956//	276	56	3,665	1,690	1,815	250	56	1,221	650	580

備考 村役所資料より

1958 年の家畜頭数は、牛が 259 頭、馬 72 頭、豚 5,182 頭、山羊 1,417 頭、家禽 2,065 羽、之等家畜の生産する厩肥の産量は年間 13,037 千 kg といわれ、之を堆肥の産量 2,518 千 kg と合して、15,555 千 kg の堆厩肥が本村の耕地に施用されていることになる。之を耕地 10 アール当りについてみれば 2,127 kg に当る。

農機具については最近の資料はないが、畜力及び動力用農機具は少なく、殆んど人力農機具依存である。1958 年以降動力耕耘機が 7 台導入され、12 月～4 月の農繁期労働のピークを崩し、大豆や甘藷の適期植付に役立っている。

3. 調査部落および調査農家の経営状況

1) 調査部落の概況

調査村は往時、K, T, Yo, Kl, A, Ar の 8 邑からなり、爾後邑の分割統合が行なわれ、明治 36 年の土地整理により、Tm, Yo, T, K, S, G の 6 つの大字となった。降って昭和 23 年 6 月部落の分割が行なわれ、現在は東部に K, I, U, Y, 南部に T, Yo, Ta, 西部に S, To, Ko, 北部に G, H, Tm の 13 カ部落となっている。調査部落は南部の Yo 部落で役所の南方凡そ 1 km の地点にあって公民館活動等で名をあげた純農村である。13 カ部落中第 3 位の

第 16 表 自小作別農家戸数と面積 (Yo 部落)

	戸 数					面 積				
	自作	自小作	小自作	小作	計	自 作	自小作	小自作	小 作	計
1954年	82戸	68	14	—	164	4,910a	2,730	1,680	—	9,320
1955//	98	48	18	9	173	4,520	3,710	580	160	8,970
1956//	108	32	15	14	169	6,320	2,170	480	360	9,330

備考 村役所資料より

大きな部落で、農家戸数は 169 戸で、農家人口は 965 人である。

調査部落の自小作別農家戸数は第 16 表の如く、自作農および小作農は年々増加し自小作農および小自作農は減少の傾向にある。又之等の面積も自作農小作農は増加し、自小作農および小自作農は減少している。この傾向は村とは逆の関係にある。

第 17 表 農家人口と農業従事者 (Yo 部落)

	農 家 人 口			農 業 従 事 者		
	男	女	計	男	女	計
1954年	503人	562	1,065	249	333	582
1955//	510	572	1,082	268	319	587
1956//	—	—	965	159	163	322

備 考 村役所資料より

Yo 部落は農家人口および農業従事者数ともに 1955 年は 54 年に比し増加しているが、1956 年は 55 年に比し、農家人口は 1 割強の減少であるが、農業従事者数は 4 割強も減少している。1954 年、55 年は農家人口の略半数が農業従事者であるが、56 年はその 3 分の 1 が農業従事者となっている。

部落の経営規模別農家戸数は第 18 表の如く、100 アール以下の農家は 169 戸中、159 戸で総数の 94% に当り、100 アール以上の農家は僅かに 6% で、村平均の 9.9% よりも低い。

第 18 表 経営規模別農家戸数 (Yo 部落)

	5 アール以下	5~10 a	10~30 a	30~50 a	50~100 a	100~300 a	300 a 以上	計
1954年	—戸	11	33	62	49	9	—	164
1955//	1	3	23	45	93	8	—	173
1956//	—	17	64	41	37	10	—	169

備 考 村役所資料

第 19 表 部落別家畜頭数 (1958 年 11 月現在)

部落	農家戸数	牛	馬	豚	山羊	家禽	1 戸平均頭数	堆厩肥 10a 当施用量	厩肥の生産量
K	329戸	58	10	1,150	328	34	1.006	2,310 kg	2,889 ㏍kg
T	211	26	9	751	112	557	0.957	1,970	1,714
Yo	165	38	2	485	184	286	0.959	2,090	1,338
S	142	35	16	503	145	154	1.180	1,950	1,363
Ko	122	20	5	540	137	258	1.223	2,268	1,298
Tm	120	14	7	400	163	247	0.998	1,837	1,038

- 備 考
1. 本表は農家戸数 100 戸以上の部落についての調査である
  2. 1 戸当頭数は大家畜に換算した数である
  3. 東風平村農協の資料より

家畜の飼養頭数は村内 13 カ部落中、牛、山羊、鶏は第 2 位で、豚は第 5 位、馬は第 11 位  
 大家畜換算に於ける 1 戸当飼養頭数も第 11 位である。

前記家畜の生産する厩肥の産量を村内 13 カ部落中農家戸数が 100 戸以上の 6 カ部落につい  
 てみれば Yo 部落は第 4 位で K 部落の半分以下である。しかし春秋に於ける堆肥の製造高は  
 308,138 kg で村内でも第 4 位にある。之等堆厩肥の施用量を 10 アール当りについてみれば  
 13 部落中第 8 位、しかし村の到達目標たる 10 アール当 3,000 kg にはまだまだ遠い。

2) 調査農家の経営状況

第 20 表は Yo 部落 165 戸中より 15 戸だけ抽出して聴取りによって調査したものをまと  
 めたものである。

第 20 表 調査農家の経営状況

農家 番号	家 族			経営耕地			原 野 a	小 作 地 a	貸 付 他 a	農 機 具				家 畜			出 稼 者 数	
	人 員	農 業 従 事 者	人	田 a	畑 a	計 a				犁	脱 穀 器	噴 霧 器	自 転 車	牛 車	牛	豚		山 羊
1	12	2	—	20	80	100	10	—	—	2	—	—	—	1	2	母1 子8	—	2
2	3	1	—	40	80	120	166.7	—	畑33.3	1	1/2	1/2	—	1	1	2	—	—
3	5	2	—	28.3	83.3	111.6	66.7	—	山畑 8.3 6.0	2	1	—	—	1	1	3	—	—
4	10	2	—	23.3	105	128.3	100	山畑 8.3 11.7	—	2	1	1	—	1	1	母1 子3	—	1
5	13	2	—	10	83.4	93.4	—	—	—	—	1	—	—	—	—	母1 子7	—	4
6	9	2	—	13.4	50	63.4	16.7	田 6.7	—	1	1/2	—	—	1	1	母1 子9	1	2
7	5	1	1	10	66.7	76.7	6.7	—	—	—	1/2	1/2	1	—	—	2	—	—
8	4	2	—	—	66.7	66.7	20	畑 13.3	—	—	—	—	—	—	—	1	4	—
9	7	—	2	13.3	43.3	56.6	66.7	—	—	—	1/2	1/2	—	—	—	—	2	1
10	9	1	—	14.3	66.7	81.0	23.3	—	—	—	1/4	1	—	リヤ カー1	1	—	2	2
11	8	1	—	20	66.7	86.7	30.0	田畑 3.3 10.0	—	1	1	1	—	1	1	母1	—	1
12	11	2	1	15	40	55	—	田 10.0	—	—	1	—	—	—	—	母1 子4	3	—
13	9	2	1	10	68.3	78.3	—	田畑 5.0 4.3	—	—	1	—	—	—	—	母1 子3	4	2
14	7	1	1	19	63.4	82.4	—	畑 6.7	—	—	1	—	—	—	—	母1 子4	—	—
15	6	2	—	—	56.7	56.7	16.7	—	—	—	—	—	1	—	—	2	2	—

- 備 考 1. 聴取調査による  
 2. 脱穀器、噴霧器の 1/2, 1/4, 1/5 は夫々 3 人, 4 人, 5 人共同  
 3. 母は母豚、子は子豚、その区別なきは肥育豚の頭数である

(イ) 家族員数と農業従事者

家族数は No. 5 農家の 13 人が筆頭で、次いで No. 1 の 12 人, No. 12 の 11 人の順で、  
 少い農家は No. 2 の 3 人で、15 戸の平均は 7.9 人となっている。各農家とも家族総数の多

い割合に農業従事者の数は少ない。多い農家でも 3 人、少ない農家ではたった 1 人、15 戸の平均は 1.9 人である。

当部落は兼業農家が多い様である（資料なし）。調査農家 15 戸中にも 8 戸の兼業農家がいる。兼業者の数は 15 人で、多い農家は 1 戸から 4 人も兼業者が出ている。兼業は公務員が 4 人、軍作業が 3 人、民の作業が 8 人であって、民間関係の作業では琉球製糖株式会社の製糖期のみの就業の如く臨時的なものもある。

#### (ロ) 経営耕地

調査農家中水田の多いのは No. 2 農家の 40 アールで、No. 8, No. 15 農家の如く全く水田を持たない農家もいる。水田は殆んどが天水田で、第 1 期、第 2 期ともに完全に収穫出来る水田は少なく、村全体でも 4 割程度だと云われている。水利の便が悪いために 10 アール当収量も少なく、2 期作は収穫皆無の事も珍らしくない。最近ではかかる天水田を畑地化する農家が増加してきた。

畑の面積は No. 4 農家の 128.3 アールが筆頭で No. 1, No. 2, No. 3 農家も 100 アール以上である。栽培作物は甘蔗、甘藷、大豆が主でその他の作物は少ない。

山林、原野は少なく、樹園地はない。

#### (ハ) 農機具及び家畜

調査農家の農機具の所有状況は第 20 表の如く、畜力、動力用農機具は少なく、殆んどが手用農具である。

牛は 15 農家中その半数の 8 戸に 9 頭飼われ、馬は 1 頭もなく、豚は母豚が 8 頭、仔豚が 26 頭飼われている。この仔豚の売却による現金収入は甘蔗の販売収入とともに調査農家や調査部落に於ける二つの大きな現金収入部門である。

#### (ニ) 作物

調査農家に於ける主要農作物の生産状況は第 21 表の如くで、1 戸当収穫面積については水稻の 32.6 アールが多く、次いで甘蔗、甘藷、大豆が各々 17.5 アール、17.6 アール、15 アールとなっている。主要作物の平均 10 アール当収量は、甘蔗が 10,390 kg で村平均の 8886 kg より高く、部落平均の 11,610 kg より低い。

甘藷の 10 アール当収量は 2,150 kg で、村平均の 1,875 kg より 14% も高い。水稻は 1 期、2 期平均で、10 アール当収量は 181 リットルで、村の 248 リットルよりは 37% も低い。これは 1958 年にかつてない干魃のため天水田の多い調査農家では 2 期作が収穫皆無或は大減収をきたしたためである。

大豆の 10 アール当収量は 155 リットルで、村の平均 164 リットルよりは少ない。

#### (ホ) 労働力

農業労働は殆んど家旅労働に依存しているが、12 月から翌年 3 月迄の農繁期労働は、自家労働の不足を「ゆい」又は雇傭労働にたよっている。

雇傭労働の多い農家は No. 4 で、甘蔗作に対し年間 60 日、稲作に対して年間 16 日を雇傭し、No. 11 農家は甘蔗と水稻に対し年間 60 日の雇傭をやっている。

### 4. 甘蔗生産の状況

#### 1) 蔗作農家

調査村における蔗作農家数は 1955 年は 1,292 戸で総戸数の 86%、1956 年は 1,308 戸で総戸数の 78% を占めている。

1 戸当りの蔗作面積は 1955 年は 12.7 アール、1956 年は 17.0 アールで増加の傾向にある。

第 21 表 作物生産の状況 (調査農家)

農家番号	甘 蔗			水 稻			甘 藷			大 豆			全肥の 施用量 袋
	面積 a	1 a 収 kg	当 量 生産量 千kg	面積 a	1 a 収 立	当 量 生産量 立	面積 a	1 a 収 kg	当 量 生産量 kg	面積 a	1 a 収 立	当 量 生産量 立	
1	16.7	719	12.0	40.0	20	800	20.0	234	4,680	13.3	15.6	207.5	7
2	23.3	1,288	30.0	80.0	19	1,620	16.7	179	3,000	20.0	19.5	390.0	15
3	23.3	996	23.2	56.6	15	849	13.3	271	3,600	20.0	15.6	312.0	7
4	23.3	1,064	24.8	15.0	15	225	33.3	180	6,000	20.0	15.6	312.0	11
5	20.0	1,350	27.0	20.0	20	400	23.3	270	6,300	10.0	15.6	156.0	10
6	13.3	902	12.0	26.6	14	372	11.7	269	3,150	10.0	15.6	156.0	5
7	23.3	1,030	24.0	33.4	19	635	10.0	216	2,160	20.0	7.8	156.0	10
8	28.3	634	18.0	—	—	—	20.0	180	3,600	20.0	12.9	258.0	3
9	12.3	1,109	13.6	20.0	20	400	6.7	179	1,200	13.3	—	—	—
10	6.7	1,254	8.4	28.6	19	543	13.3	271	3,600	10.0	15.6	156.0	3
11	16.7	539	9.0	20.0	11	220	20.0	180	3,600	20.0	2.6	52.0	4
12	21.7	1,382	30.0	26.0	21	546	10.0	270	2,700	10.0	18.2	182.0	9
13	11.0	873	9.9	20.0	20	400	33.3	144	4,800	13.4	19.5	261.3	5
14	6.7	1,791	12.0	38.0	17	646	13.3	217	2,880	13.3	17.7	235.4	3
15	16.6	1,157	19.2	—	—	—	20.0	270	5,400	15.0	15.6	234.0	10

調査部落の1戸当り蔗作面積は 1955 年が 9.8 アール、1956 年が 14.5 アールで村の平均よりは低い。

蔗作農家を階層別にみれば第 22 表の如く、村全体としてみれば 20 アール未満の作付農家が 82% で大部分である。50 アール以上の農家と 50 アール未満の農家についてみれば前者が

第 22 表 蔗作面積別農家戸数 (1957 年)

部落名	農家戸数	蔗作農家	5 アール以下	5~10 a	10~20 a	20~30 a	30~40 a	40~50 a	50~70 a	70 a 以上
K	335戸	301戸	67戸	116戸	83戸	29戸	5戸	1戸	—戸	—戸
T	218	140	44	23	55	12	5	1	—	—
Yo	168	158	33	65	46	12	2	—	—	—
S	142	136	18	39	48	19	9	3	—	—
Ko	123	121	14	31	46	20	9	1	—	—
Tm	124	119	13	35	39	18	7	3	4	—

備考 村役所資料より

1% で後者が 99% の多きを占めている。調査部落は 50 アール以上の農家は 1戸もなく、殆んどが 10~20 アールの層に集中している。158 戸の蔗作農家中 70% が 10~20 アールの農家であって、30~40 アール層の農家は僅かに 9% にすぎない。

調査農家 15 戸の作付面積を階層別にみれば 10 アール以下の階層が 2 戸で 13%、10~20 アールの階層が 6 戸で 40%、20~30 アールの階層が 7 戸で 47% となり部落の割合より高い。

## 2) 品 種

琉球に於ける藩政時代の製糖用甘蔗は、在来種と読谷山種の 2 種が主として栽培せられていた。読谷山種が最初栽培された年代は不明であるが旧藩時代読谷山楚辺住の比嘉次良なる篤農家が在来種中から選抜育種したものだと言われている(知花氏談)。収量、蔗糖含量、ともに在来種にまさるので、明治、大正年間に亘って広く栽培せられたのである。当局は沖縄の重要な換金作物たる甘蔗の品種改良に力を注ぎ明治 45 年台湾から 161 poj なる品種を導入試作したがよい成果が得られなかったため奨励品種となる迄には至らなかった。越えて大正 12 年 12 月に大茎種 2714 poj 10 本を台湾総督府蔗苗養成所よりの移入を契機として、次々に poj 系や F 系の品種が導入され、西原試験地や沖縄社津嘉山農場等で試作された。poj 系では最初に 2714、次いで 2725、2727、1499、2878、2883 の 6 品種と F 系の 108 が試作された。その結果、蔗茎の収量や含糖量が多く、沖縄の気候、風土に適した品種として 2725 poj が広く栽培せられる様になった。それ以後従来の読谷山種および在来種は年々減反し昭和 14 年期以後全く後を絶った。poj 系の品種中でも 2725 poj が断然多く昭和 14 年期には全蔗作面積の 98.8% を占めるに至った。即ち第 23 表の通りである。

第 23 表 品種別作付面積と割合 (昭和 14 年期)

	実 数						割 合					
	2725 poj	2878 poj	F 108	2883 poj	読谷 山種	計	2725 poj %	2878 poj	F 108	2883 poj	読谷 山種	計
東風平村	49,840 <sup>a</sup>	30	550	30	—	50,450	98.8	0.0	1.0	0.0	—	100.0
旧島尻都	442,100	144	1,929	40	—	444,213	99.5	0.0	0.4	0.0	—	100.0
全 沖 縄	1,485,739	4,300	2,859	320	9,424	1,502,642	98.8	0.3	0.2	0.0	0.6	100.0

備 考 糖業い報より

2725 poj は戦後の今日に至る迄栽培面積に於て首位を占めている。1957 年 11 月新に NCO 310, H44-3908 の 2 品種が奨励品種として指定され普及に努めつつある。

## 3) 甘蔗の生産

調査村に於ける昭和年間(昭和 7 年~13 年)の甘蔗の生産状況は第 24 表の如く、7 年間に

第 24 表 戦前の甘蔗生産状況 (調査村)

	昭和 7 年	8 年	9 年	10 年	11 年	12 年	13 年
栽培面積	53,420 <sup>a</sup>	53,050	53,400	53,140	52,890	54,410	50,570
10アール当 取 量	7,473.6 <sup>kg</sup>	8,586.6	7,755	9,166.2	6,733.6	6,664.2	9,735.6
生産量	39,924 <sup>千kg</sup>	45,552	41,412	48,709	35,614	36,260	49,233

備 考 糖業い報より

おける作付面積の最高は昭和 12 年期の 54,410 アールでその後は僅かずつではあるが減反している。

10 アール当収量の最高は昭和 13 年期の 9,735.6 kg で、生産高に於ても最高の年である。調査村は戦前甘蔗の作付面積、生産高ともに南部地区 22 市町村中第 1 位であったが 10 アール当収量においては必ずしもそうではなかった。戦後も甘蔗の栽培は盛んであるが、面積においては戦後最高の 1958 年期の 21,672 アールは大正の末期頃の面積におよぼす、最高年次の昭和 12 年に比すれば 4 割程度にすぎず、しかし戦後作付面積が年々増加している事は第 25 表にみる通りである。即ち 1954 年に 10,580 アールの蔗作面積が 5 年後の 1958 年には 21,672 アールと 2 倍以上に伸びている。しかし戦前（昭和 12 年）への回復率からすれば前述の如く昭和 12 年の 4 割といった所である。本村は米単収による耕地もないので将来蔗作面積拡張の余地は多々あるように思う。

1 戸当蔗作面積は戦後最高の 1956 年が 17 アールで、之を昭和 14 年期の 35.4 アールに比すれば半分以下である。10 アール当収量はその年の気象特に台風や干魃および病虫害発生の多少に影響される事が大きい。

調査村の戦後の 10 アール当収量の最高は 1955 年の 10,302 kg で、前年の 7,329 kg に比すれば 42% の増収であり、56 年に比すれば 69%、57 年に比すれば 17% の増収となっている。

生産高に於ける戦後の最高は 1957 年の 17,177 千 kg で、之を 1954 年に比すれば実に 2 倍以上の生産高である。

調査部落における生産状況は第 24 表の如く、1954 年以降毎年増加している。即ち 1957 年は 1954 年に比し、面積、10 アール当収量、生産高が各々 60%、20%、92% の増加を示している。調査部落は村内 13 カ部落中面積において第 5 位、10 アール当収量において第 1 位、生産高において第 2 位を占める蔗作部落で、戦後の推移は第 24 表の通りである。調査部落の最近の傾向として夏植面積の激増と之に伴う春植、株出の減少がみられる。この現象は調査農家についても強く現われてきている。その理由として次の事があげられている。

(a) 現在の栽培品種たる 2725 poj を春植にして次期に株出しようとすれば一般に芽の出が悪く収量も少ない。

(b) 台風の年に春植は梢頭部からの折損が多くそのため収量も少なく、品質や砂糖の歩留りも悪い、之に比し夏植の方は被害は軽微である。

(c) 今迄夏植の収穫の時期には糖価が上り、春植や株出の収穫期には一般に糖価が下落の傾向にあった。

(d) 春植の植付適期たる 2~3 月は農繁期で労働競合がひどいので適期植付けが出来ないために収量も一般に少ない。

(e) 春植甘蔗は雑草の発生時期とかち合い、除草労働を多く要する。

以上の様な理由から調査部落及び農家では夏植が多く春植や株出は非常に少ない。

調査農家 15 戸中僅かに No. 4, No. 15 農家に春植が各々 3.3 アールと、No. 8 農家に株出が 5 アール栽培されているにすぎない。この 3 農家の春植株出の品種は戦後新しく奨励品種に指定された NCO 310 が多い。この品種は株出しによいので今後当部落に於ける春植や株出し面積の増加をもたらすであろう。ところがこの新品種について蔗作農家は次の様な欠点を指摘している。即ち病虫害（特に綿蚜虫）に弱い事、ブリックスが低いこと、収穫後地の耕起が従来の 2725 poj 後地に比し労力がかかる。分けつが多いため剝葉や培土、薬剤散布上不便である。除けつ茎や梢頭部は家畜が余り好まない等である。しかし前記 2 品種は農家におけ



第 25 表 戦 後 甘 蔗 生 産 の 推 移

(1) 面 積 (アール)

	1954 年			1955 年			1956 年			1957 年						
	夏 植	春 植	株 出 計	夏 植	春 植	株 出 計	夏 植	春 植	株 出 計	夏 植	春 植	株 出 計				
全 琉 球	292,620	193,500	148,630	634,760	382,520	224,250	202,600	809,370	416,660	265,520	255,930	938,120	441,950	230,010	279,800	951,290
南 部 地 区	90,770	63,460	76,330	230,560	129,680	69,840	106,170	305,690	150,380	81,430	126,520	358,330	160,840	60,750	140,290	361,870
東 風 平 村	5,420	3,460	1,700	10,580	11,790	2,660	2,020	16,470	14,890	3,090	2,140	20,120	17,030	980	1,320	19,330
Y <sub>o</sub> 部 落	890	170	60	1,120	1,310	140	110	1,560	1,880	210	120	2,210	1,730	10	30	1,770

(2) 10 アール当収量 (kg)

全 琉 球	7,114	4,905	4,575	5,839	6,881	4,969	4,459	5,726	4,898	3,176	2,651	3,960	5,877	3,045	3,243	4,416
南 部 地 区	10,728	6,023	5,625	7,346	10,260	6,780	5,584	7,751	5,749	3,341	3,806	4,515	8,001	3,564	4,161	3,966
東 風 平 村	8,400	6,600	5,400	7,329	11,514	7,920	6,336	10,302	6,900	3,900	3,600	6,084	9,276	6,294	4,200	8,886
Y <sub>o</sub> 部 落	10,590	6,660	4,800	9,600	—	—	—	11,283	—	—	—	6,558	—	—	—	11,610

(3) 生 産 量 (千 kg)

全 琉 球	208,163	94,909	68,003	374,370	263,220	111,424	90,334	463,466	204,060	84,334	67,856	371,561	259,467	70,037	90,738	410,091
南 部 地 区	88,298	38,220	42,934	169,406	133,050	47,351	59,284	237,023	86,449	27,206	48,156	161,731	128,686	21,649	58,374	143,518
東 風 平 村	4,453	2,284	918	7,754	13,575	2,107	1,280	16,967	10,274	1,205	770	12,241	15,797	617	554	17,177
Y <sub>o</sub> 部 落	—	—	—	1,079	—	—	—	1,760	—	—	—	1,449	—	—	—	2,075

備 考 糖 業 課 資 料 (産 糖 実 績) より

る栽培が日尚浅きため例え上記の如き欠点あるにしてもすぐにこの品種は不適であると結論を下す前に、後 2, 3 年間台風に対する抵抗性、春植や株出の良否等について栽培の経過をみる必要があると思う。

調査農家における甘蔗の生産状況は第 21 表の如く、収穫面積において 15 農家の平均は 17.5 アールで、面積の多い農家は No. 8 の 28.3 アールで少ないのは No. 10, No. 14 の 6.7 アールである。10 アール当収量の多い農家は No. 14 農家の 1,7910 kg で、少ないのは No. 8 農家の 6340 kg で前者の略 3 分の 1 である。No. 14 農家の 10 アール当収量の多いのは経営面積が少なく且つ地力の高い畑に甘蔗の作付がなされているためであり、又 No. 8 農家の 10 アール当収量の少ないのは、家から 1,000 m 以上もある地力の低いマーザ地帯に甘蔗の作付がなされていること化学肥料の施用量が少ないためである。この農家は家畜も牛 1 頭、豚 4 頭を飼育し、堆厩肥の施用量も多いと思われるが収量は少ない。

4) 砂糖の生産

本島南部地区の分蜜糖は琉球製糖株式会社により、又含蜜糖は動力若しくは畜力利用の小型工場により製造されている。戦前本村の産糖量は第 26 表の如く昭和 6 年以降年々増加し、最高は昭和 10 年で 67,786 挺生産されている。黒糖、白下糖の割合は前者が 9 割以上を占め、後者は僅かに 2 分内外にすぎない。

分蜜糖および含蜜糖の原料蔗茎量は第 27 表の通りである。

分蜜糖、含蜜糖の割合は昭和 12 年迄は前者が多く昭和 13 年には略同量宛製糖されている。

第 26 表 含蜜糖生産高 (東風平村, 戦前)

	昭 6 年	7	8	9	10	11	12	13
黒 糖	50,708 <sup>挺</sup>	46,105	45,995	56,368	67,261	38,522	40,165	64,097
白下糖	146	11,212	2,092	146	525	506	87	1,794
計	50,854	50,317	48,087	56,514	67,786	39,028	40,262	65,891

備考 1. 黒糖=1 挺 72 kg, 白下糖=1 挺 60 kg.  
2. 糖業い報より

第 27 表 甘蔗の処理状況 (東風平村, 戦前)

	昭和 9 年	昭和10年	昭和11年	昭和12年	昭和13年
分蜜糖原料	158,879 <sup>千 kg</sup>	202,275	341,478	237,059	262,656
含蜜糖原料	670,711	740,065	471,265	473,600	272,604
分蜜:含蜜	1:4.3	1:3.5	1:1.3	1:2	1:1

備考 糖業い報より

戦後調査村に於ける生産蔗茎の処理状況をみるに第 28 表の如く、1954 年から 1956 年迄は琉球製糖株式会社に搬入せられた分蜜糖原料蔗茎が多く、1957 年は略同量位になっている。調査部落は全部分蜜糖原料として琉糖社に搬入している。

含蜜糖原料蔗茎は村内 9 カ所の中小製糖場により黒糖に製造されている。1956 年の製糖場別製造高を示せば第 29 表の如くであって、9 工場の平均製糖高は 44,240 kg, 原料蔗茎は

第 28 表 甘蔗の処理状況（東風平村，戦後）

	1954 年	55 //	56 //	57 //
分蜜糖原料	4,331 <sup>千 kg</sup>	9,891	8,245	8,645
含 //	3,423	7,074	3,785	8,323
分蜜：含蜜	1：0.8	1：0.7	1：0.45	1：0.96

備考 村役所資料より

第 29 表 製糖場別製造高（東風平村）

	箇所数	甘蔗圧搾高 <sup>kg</sup>	歩 留 <sup>%</sup>	製 糖 高 <sup>kg</sup>	平均操業日数 <sup>日</sup>	備 考
10 屯	2	170,160	9.05	15,498	28.5	
15 //	2	663,876	9.45	62,904	18.3	
20 //	1	518,238	9.8	49,200	31	
25 //	1	572,058	9.9	56,634	39	
30 //	2	1,121,454	11.0	123,360	42.5	
40 //	1	754,752	12.0	90,570	37	
計	9	3,784,788	—	398,166	196.3	
平均		420,532	10.5	44,240	32.7	

備考 糖業課資料より

420,532 kg, 平均操業日数は 32.7 日となっている。9 工場の総圧搾高は 3,784,788 kg で村の総生産量の 32% に当る。12 月から翌年 3 月に至る 4 ケ月の製糖期間に 30 日余の操業日数は短いと思う。この点製糖場の運営上今後検討さるべき問題ではなかろうか。

含蜜糖の品質について述べると、第 30 表の如く、戦前昭和 13 年の本村の特等、1 等の割合は 52.8% で、島尻郡（現南部地区）の 59.2%、全沖縄の平均 57.24% よりも低い。之に反し 2, 3 等および不合格糖の割合は島尻郡、全沖縄のそれよりも高い。品質については本村は戦前島尻郡 23 市町村中第 16 位であった。

戦後（1956 年）に於ける黒糖の特等、1 等の割合は、東風平村、南部地区、全琉球が夫々 51.43%、37.53%、15.54% で、調査村は全琉および南部地区の比率よりもはるかに低い。之に反し不合格糖の比率は戦前より高くなり総体的に品質の低下をきたしている。本村の黒糖について今後の課題は、9 含蜜工場に於ける原料蔗茎量の大量確保と、之に伴う操業日数の延長および品質の向上の 3 点にある様に思う。

第 30 表 黒糖品質の比較 (戦前, 戦後)

		検 査 数	合 格 糖				不 合 格	
			特 等	一 等	二 等	三 等		
昭和十三年	全 沖 縄	1,075,948	39,566	576,283	331,708	122,488	1,070,103	5,845
	島 尻 郡	444,344	16,895	248,903	132,573	44,067	442,455	1,889
	東風平村	52,723	428	27,295	17,446	7,251	52,420	303
割 合	全 沖 縄	100.0	57.24		30.83	11.38	99.45	0.55
	島 尻 郡	100.0	59.82		29.84	9.92	99.58	0.42
	東風平村	100.0	52.58		33.09	13.75	99.42	0.58
一九五六年	全 琉 球	410,438	56,293	154,792	120,064.5	72,922	404,076.5	6,361.5
	南部地区	108,463.5	10,092	27,685.5	37,977	30,777.5	106,532	1,931.5
	東風平村	7,029	9	1,111.5	2,696	3,060	6,876.5	152.5
割 合	全 琉 球	100.0	13.72	37.71	29.25	17.77	98.45	1.55
	南部地区	100.0	12.00	25.53	35.01	28.38	98.22	1.78
	東風平村	100.0	0.13	15.81	38.36	43.53	97.83	2.17

備考 戦前は糖業い報, 戦後は糖業課資料より

む す び

以上東風平村 Y<sub>o</sub> 部落に於ける 15 戸農家の農業経営の実態について述べてきたのであるが、経営および甘蔗の経済収支の面については記帳がなされていないこと、調査時に甘蔗の収穫が完了していない農家が多かったこと、聴取り調査では信頼出来ない箇所が多かったこと等で之を省略した。

輪作方式については先に報告した南風原村 K 部落のそれと大差がないので之も省略した。

調査村の甘蔗作について戦後の回復率を見るに次の如く、1957 年の回復率を戦前の昭和 13 年と対比すると、収穫面積、10 アール当収量、生産高は夫々 38%、91%、38% で面積と生産高はやっとなら 3 分の 1、10 アール当収量は戦前の水準に接近しつつあり、面積の回復率 38% は全琉平均の 63%、南部地区平均の 82% より非常に低く、10 アール当収量の 91% は全琉平均の 60%、南部地区平均の 43% よりはるかに高い。

	面 積			10 アール当収量			生 産 高		
	全琉球	南部地区	東風平村	全琉球	南部地区	東風平村	全琉球	南部地区	東風平村
昭 13 年	100	100	100	100	100	100	100	100	100
1957 年	63	82	38	60	43	91	37	35	35

甘蔗作に関する調査村の今後の課題は、先づ作付面積の増加が優先されるべきであると思う。軍による接収耕地の少ない本村として前記の 38% の回復率を 70~80% 以上に伸ばすことは

大した至難の事ではないと思う。増反の対象は天水田（戦後畑から水田に切替えられた所）の畑地化，荒蕪地，原野の開墾等が考えられる。

一方 10 アール当収量の増加は適期植付の励行，病虫害防除の徹底，自給肥料や化学肥料の増施，或は夏植甘蔗を増やすことによって可能である。Yo 部落が夏植のみを栽培し 10 アール当収量の増加をもたらしていることは前記の通りである。

黒糖品質の改善向上の問題については Yo 部落の如く原料蔗茎全部を分蜜糖原料に廻している所は別であるが，村当局としては 9 カ所の小型工場の操業日数延長のための原料蔗茎の確保と共に将来大きく取上げらるべき問題であると思われる。

#### 参 考 文 献

1. 沖縄県農会編（昭和 15）：糖業い報（第 4 号）。
2. 東風平村役所（1956）：経済振興計画実態調査結果書。
3. 東風平村役所（1957）：基本計画（第 2 編）。
4. 東風平村社会福祉協議会（1958）：研究発表会記録。
5. 琉球大学（1958）：琉球農林統計表（琉大普及叢書，第 12 号）。
6. 琉球政府経済局糖業課（1954～57）：産糖実績。
7. 我謝栄彦（昭和 13）：糖業教科書。